

愛憎や熟柿押したる指の先

野本 京

『一見して若書きの句とわかる。「愛憎や」と言っているけれど、複雑なからみ合った愛憎ではあるまい。詮じつめれば「愛」だ。そう思わせる初々しさが一句に流れている。中七下五のしつかりしたデッサンが、上五を支えている。』 湘子の評をいただく。

昭和五十七年作